

<スイスのエコロジー>

昨年の秋に、スイスで開かれた“エネルギー転換フェスティバル”へ行きました。私の所属している市民グループのメンバーで、スイスに住んでいるHさんが、招待してくださったのです。スイスのエコロジーをすこし見ましたので、書いてみました。

★ “エネルギー転換フェスティバル” での人形劇 ★

“エネルギー転換フェスティバル”はバーゼル市近郊の丘の上でありました。100人位の家族連れが数日間テントで宿泊しながら、脱原発やエネルギー問題について話し合っていました。

私は人形劇をすることになり、テーマはいつもの「すいとうとかいもの袋をもとう」です。せりふはドイツ語で、Hさんの小学生の2人の男の子に言ってもらい、私は人形を動かしました。「わかってもらえるかな？」と不安でしたが、みんながうなずいてくれたり、最後には、「ブラボー！」という大きな声と拍手が聞こえてほっとしました。世界中、エコロジーのことを考えている人は、心はひとつなのですね。

人形劇の後は、Hさんが日本の抹茶をたてましたが、子供達たちは意外にも、おいしいといって、口の周りを緑色にして飲んでくれました。お菓子のこんぺいとうも、あつというまに全部なくなっていました。新聞紙での折り紙は、“鉄砲”を折り、バン！と音をたてて遊ぶのですが、お母さんたちも楽しんでくれました。

このフェスティバルでは、むずかしい勉強ばかりでなく、ソーラー発電で湯をわかしてシャワーをしたり、ソーラー・クッキングをしたり、子供達はソーラーカーの競争をしたりしていました。

このように、太陽光発電＝ソーラーの力＝でいろいろのことができてびっくりしますが、大昔のガスや石油がなかった時には、みんな太陽の力＝ソーラーの力＝に頼っていたわけなのです。

考えてみると日本では、朝、太陽が出て明るくなると、人も起きます。電気はつけず朝日の光で明るいのです。お茶をわかし、ごはんを炊くのは、山から取ってきたまきを使います。そのまきは木ですが、太陽にあたって大きく成長したもののなのです。朝ごはんのお米も、味噌汁のなっぺも、太陽のおかげで畑でできたものです。このように、太陽が全てのみなもとだということがわかりますね。

今では生活の仕方も昔とは違うので、同じようにはできませんが、ちょっと工夫すればできます。太陽の光をソーラーパネルで受けて、それを機械に入れると電力に変わり、コードを通して電気器具が動かされます。

私たちの「びっくり！エコ発電所」はこのようにして太陽光発電をしているところです。わざわざ石油や、石炭、原子力から電気をつくらずに、空からふりそそぐ太陽を使わせてもらっているのです。

Hさんの家も、屋根にソーラーパネルをおいて発電して、それを電力会社に売っています。雨水は、屋根からトユを伝って下においてある大きなタンクにためて、花や野菜の水やりに使っています。Tシャツの小さくなったものは、切ってアップリケ用に使ったり、細く裂いてひも状にして使っています。子供が小さい時は、みつあみに編んで、木にぶら下げてブランコにしたそうです。捨てずに何かに変身させてリサイクルすることは、とても大切なことですね。



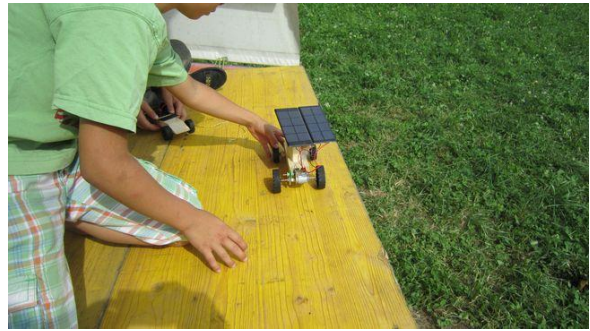
「エネルギー転換フェスティバル」会場



人形劇「すいとんとかいもの袋を持とう」



ソーラークッキング の料理はおいしそう



ソーラーカー の競争

★ <スイスの電気> ★

Hさんが住んでいるデニケン村は、チューリッヒ空港から電車で北西の方角に1時間ほどいった所にあります。教会の鐘の音が聞こえ、小高い丘の牧場には羊も飼われている静かなところですよ。

現在スイスには 5 つの原発があり、そのうちのひとつがこのデニケンにあるのです。駅のすぐ横に大きな冷却塔がそびえたち、1日中白い水蒸気を出しているのが見えます。

Hさんの家族は反原発の催しがある時には参加しているということですが、安心して暮らせる村になってほしいと願うばかりです。

日本では電気会社との契約は、1種類しかありませんが、スイスでは電気の種類を自由に選べるのです。太陽光100%を選ぶ人、水力と原発の混合電力を選ぶ人、等さまざまです。

Hさんの家の電気契約は、割高になりますが、太陽光発電です。

そして、冬にはまきストーブを使って、なるべく電気を使わないようにしています。



デニケンの原発冷却塔



まきストーブ



屋根の上にはソーラーパネル



庭には雨水タンク

★ <家庭ごみの分別> ★

家庭ごみは家の近くの集荷地点に、指定された有料のごみ袋に入れて、週に1回出します。
35リットル用10袋＝約1000円、1枚100円にもなります。
物価が日本より全て高いスイスでは、ごみ袋も高いです。

家庭ごみ以外のごみは、次のように細かく分別して、リサイクルステーションへ持って行きます。
コピー機のインクや染料、塗料までがすでに分類されていてすんでいますね。
下記はHさんの翻訳文を引用しました。

.....
大型ゴミ・古紙、ダンボール・剪定枝・(有毒物質を含む)廃棄物、特殊ゴミ・動物の死骸・
堆肥になるごみ・古い瓶・スチール、アルミ缶、ペットボトル・建築の瓦礫・古い油・
古い金属・コーヒーマシンのゴミ・コピー機のインク・繊維製品・毒薬、毒物、染料、塗料
・電池・発砲スチロール・タイヤ・アスベスト・電球・コンピューター機器・電気機器
.....

衣類・テーブルセンター・カーテン・靴は、郵便配達人が各家庭の郵便受けに赤い袋を配っていくので、それに入れて、決められた日に出します。清潔に洗って、すぐに使える状態にしておくことが約束事で、その後教会組織などで必要な人に届けられ、リサイクルされるのです。

ごみについてはどこの国も同じだな、といつも思うのですが、ごみ減量に熱心なHさんの家庭がある一方、毎回多量に出す無関心な家も見かけました。スイスもちろん車社会なので、リサイクルステーションにも、車で持ってくる人が多いようです。



缶・びん・紙のリサイクルボックス



奥には村民用 チップ状の木、まきが置いてある



缶つぶし機も置かれている



家庭用ごみ袋 35リットル

★ <埋立地の見学> ★

「どこか見学に行きたいところは？」と聞かれ、ごみ最終埋立地を見たいと言いました。美しいスイスという国がどんな埋め立て方法をしているのを見たいと思ったからです。

1つめの埋立地: 焼却ごみが満杯になった上には40cmの土をかぶせ、すぐに木が植えられ、そして頂上には市民農園ができていました。おいしそうなかぼちゃやトマトなどができているのを見て、驚かされました。

2つめの埋立地: ここは危険ではない焼却ごみが積まれてあり、浸出水も直接川に流せるということでした。本当に安全なのでしょう。すぐ横にスーパーがあり、赤ちゃん連れも出入りしていました。

3つめの埋立地: 新しい技術で管理しているという、とても広く、深さは40mもある埋立地でした。底には厚さ10cmのアスファルトが敷かれ、その上にトラックで運ばれてきた廃棄物が入られます。埋め立てたところから汚れた水が出てくるので、それは埋立地の底の部分にある、浸出水浄化処理施設できれいにされます。水を集めるパイプがはりめぐらされていて、その上を歩かせてもらいました。

京都では「あれが浸出水浄化施設です」といわれて外観を見るだけですが、スイスではこのように中に入って見せてもらうという、初めての貴重な体験をさせてもらいました。



浸出水浄化施設の出入口にて



集水パイプの上を歩く



建築廃棄物は細かく分別されている



埋立場の頂上は畑です

★ <自然と動物たちに囲まれた生活> ★

Hさん一家は、町ではなくて村に住んでいるから自然に囲まれた生活ができている、のではなく、便利さに流されず、ごみを出さない生活や、すべてに手づくりを一生懸命心がけているからなのだと思います。庭にはりんごやブルーベリーの木、ハーブがたくさんあり、畑ではじゃがいも、トマト、菜っ葉類をつくり、それをおやつや食事に使っています。二人の男の子もよく手伝っています。

食卓テーブルには手づくりの料理とともに、やはり手づくりのマットやナフキンが並び、何よりもまず食生活を大事にしているのです。小学校は給食がなく、お昼ごはんは学校から帰ってきて家で食べます。

子供達は小学校2年生になると、学校併設の音楽学校で、楽器を習うことができます。彼らはアコーディオンとバイオリンを習っていて私にも聴かせてくれました。小鳥の声と合わさっての美しい音色に、さすがにヨーロッパだと、またまた感激しました。

動物好きな一家で、捨てられていた猫を数匹飼っています。人間と同じように一匹づつに丁寧に接している姿を見て心が熱くなりました。そして、子供一人一人に「今年は動物保護団体にいくら寄付するか？」と聞いて子供のお小遣いから寄付をしているのです。日本の家庭でそのようなことをしているのは少ないのではないのでしょうか。スイスではこのように小さい時から社会性を身につけるのでしょう。見習いたいです。

また、ティンゲリー・ミュージアムへも連れて行ってもらいました。ティンゲリーは捨てられた廃棄物にモーターなどをつけて、動く立体的な作品をつくる有名なアーティストで、私の好きな作家です。ごみが立派なアートに変身するというのも、なんとすばらしいことでしょう！

ミュージアムへ行くまでライン川沿いを歩いたのですが、「びっくり！エコ」の光景にあいました。勤め帰りと思われる女性や男性が、岸辺で服をぬぎ水着になっているのです。脱いだ服やカバン、携帯、コンピュータ類はプラスチックの密封袋に入れて、それを浮き袋にして川下へ泳いでいくのです。自転車に乗るよりももっとエコな方法なので、その光景に皆で歓声をあげてしまいました。

Hさんの隣の家の広い庭には、羊が5匹寝そべっていて、それを見た時はやはりハイジのスイスだと思いました。その羊の毛をもらって、洗って、糸に紡ぎ、家族の手袋やソックスを編んでいました。私もはじめて、毛を紡ぐということを見せてもらいましたが、とても難しくてなかなか糸になりませんでした。昔の人はゆっくりと時間をかけて、手作りの毛糸を作り、編んだりほどいたりして何世代も使い続けたのでしょう。

まだ書ききれていないこともたくさんありますが、このように楽しい10日間を過ごしました。京都に住んでいても、真似のできる場所はまねをして、“毎日がエコロジー”に過ごしたいと思います。



ライン川を渡ってティンゲリー・ミュージアムへ



手づくり料理のテーブル



自転車もそのまま電車に乗せられます

<おわり>